

第4回畜産部会ヒアリング

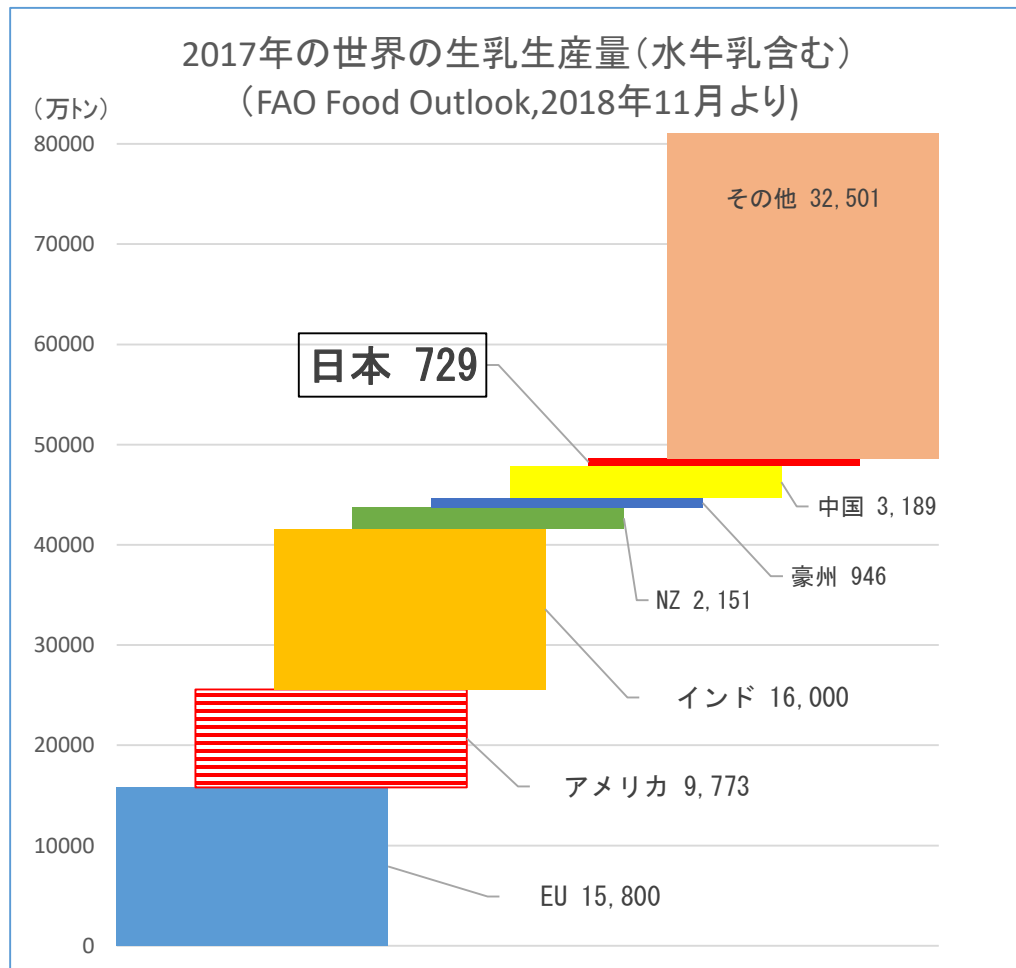
酪農乳業の調和ある発展に向けて
—失われた20年を取り戻す—

2019年8月21日
一般社団法人日本乳業協会 西尾 啓治

Index

- 1) 世界の生乳需給と日本の酪農乳業
- 2) 乳業の基本的な役割
- 3) 課題及び検討の方向

1) 世界の生乳需給と日本の酪農乳業



【世界の生乳生産】

➤ 約8億トン

【その内の日本は】

➤ 約1%(729万トン)

【世界の人口は増加】

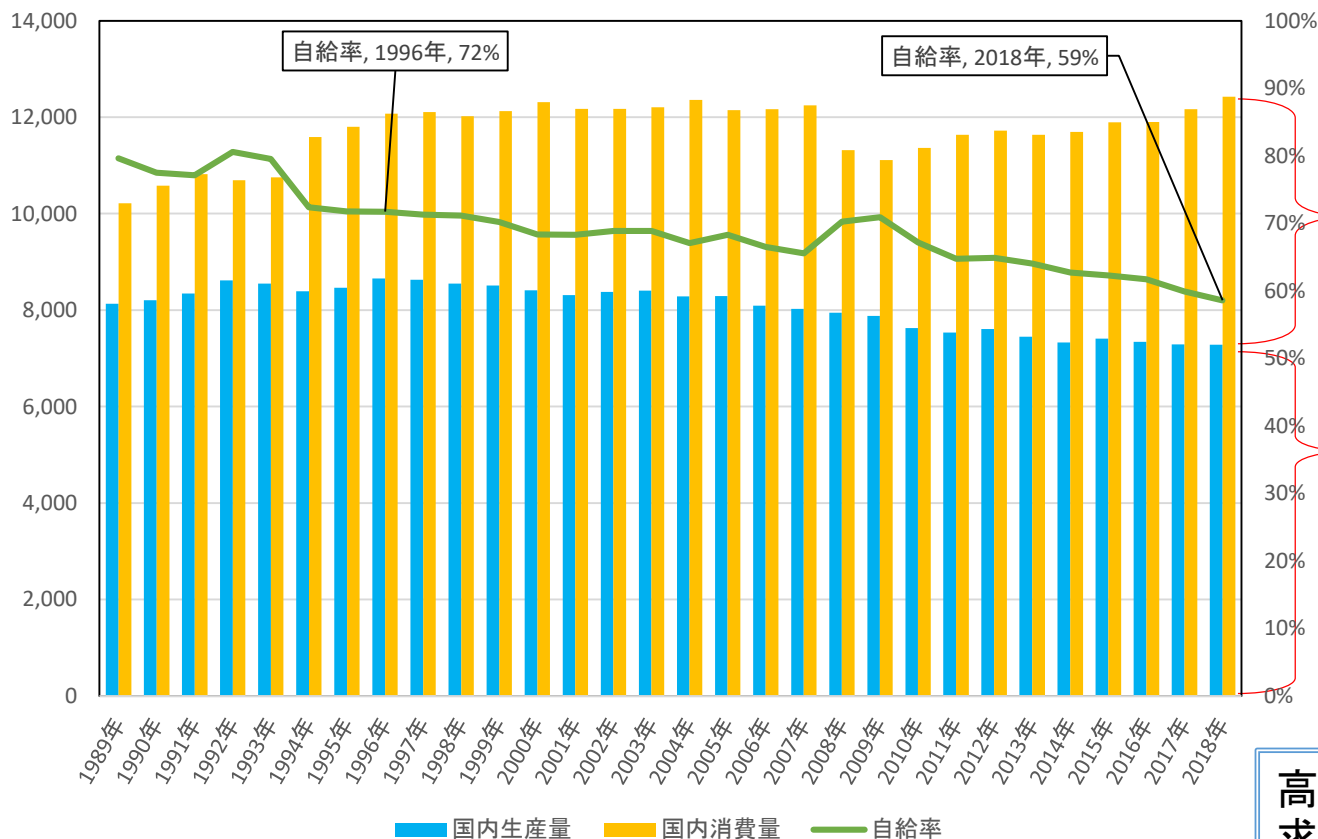
2019年: 約77億人

→2050年: 約98億人(3割増)

【世界の乳製品需要】

- 人口増加に比例して大幅に増加
- 国際市場での乳資源調達は困難になる可能性

日本の牛乳・乳製品需給構造（生乳換算）



- 【2018年度】
- 【国内消費量】
➤ 約1200万トン
- 【輸入】
➤ 約500万トン
- 【国産】
➤ 約730万トン
- 【自給率】
➤ 約59%

農林水産省：食料需給表より

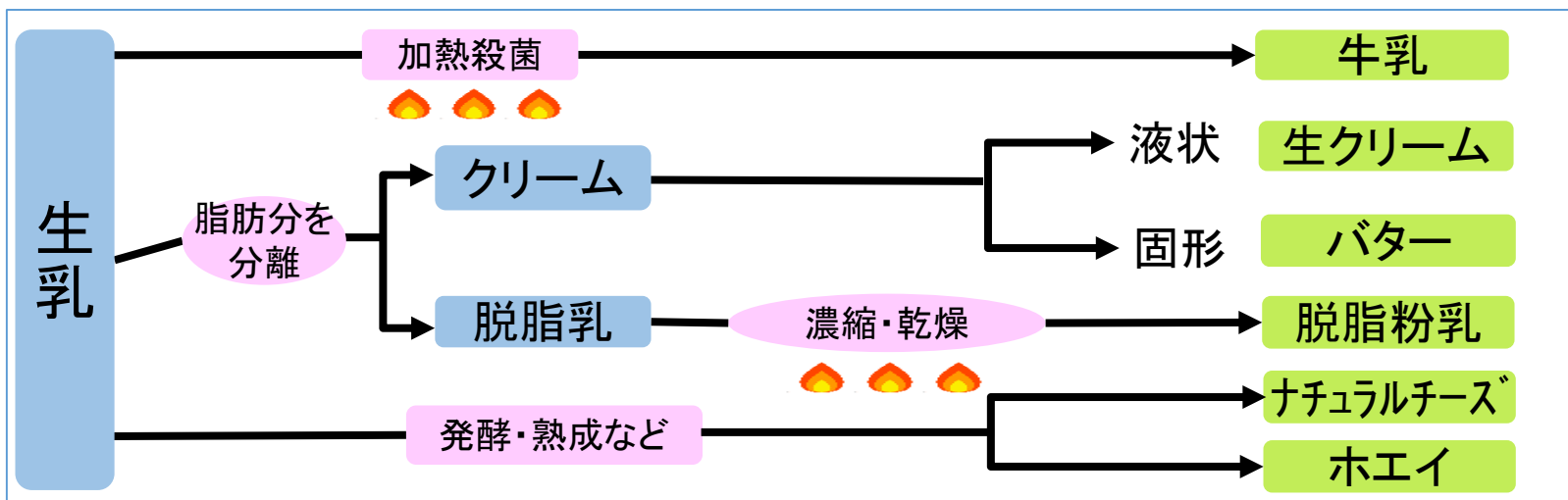
高品質な国産乳製品を
求める【強い需要】に
応えられていない

2) 乳業の基本的な役割

(1) 消費者への安全・安心な牛乳乳製品の安定的な供給

- 生乳の受け入れから牛乳乳製品の生産・出荷まで、絶えず品質を検査・確認
- 安全性を確保するとともに、変化する市場環境や消費構造の変化に柔軟に対応
- 需要に応じて安定的に牛乳乳製品を市場に供給

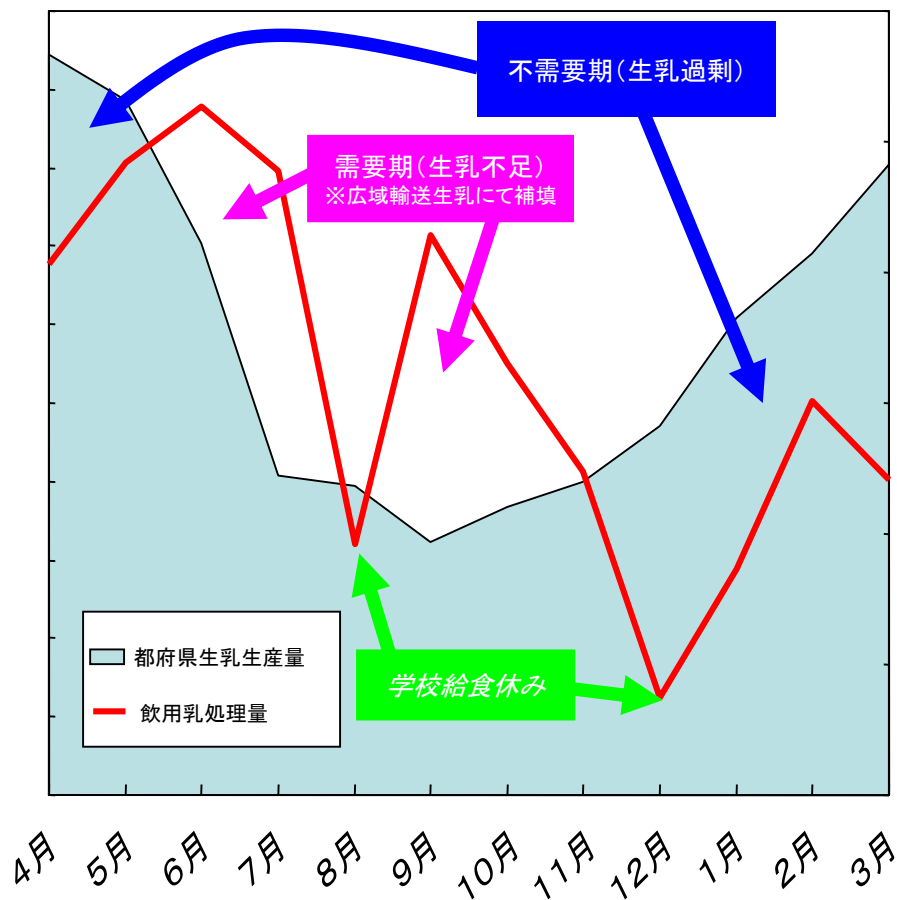
(2) 商品開発を通じた乳の価値向上



- 消費者の皆様が求める商品を開発し、食卓に賑わいと楽しさ、そしておいしさと健康をお届けしています。

(3) 安定的な生乳確保に向けた酪農経営支援

都府県の飲用牛乳の需給(季節変動イメージ)



【牛は生き物】

生乳生産量は自由にコントロールできない。

【需要は常に変化】

需要は季節や嗜好に応じて変化する。

【工業製品のような需給調整は困難】

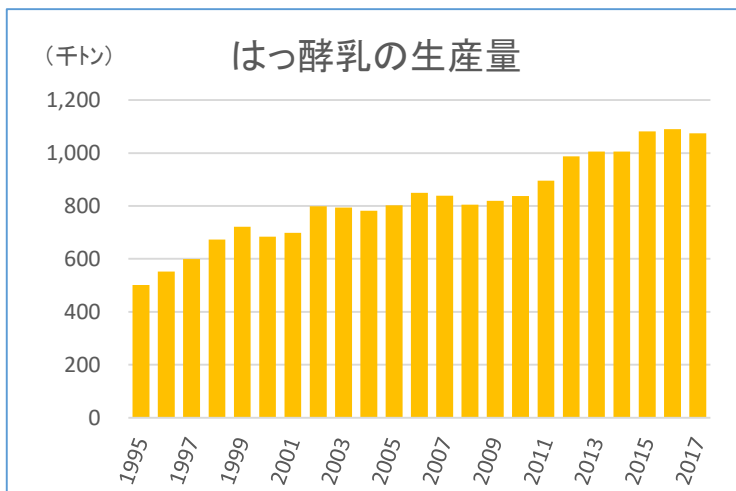
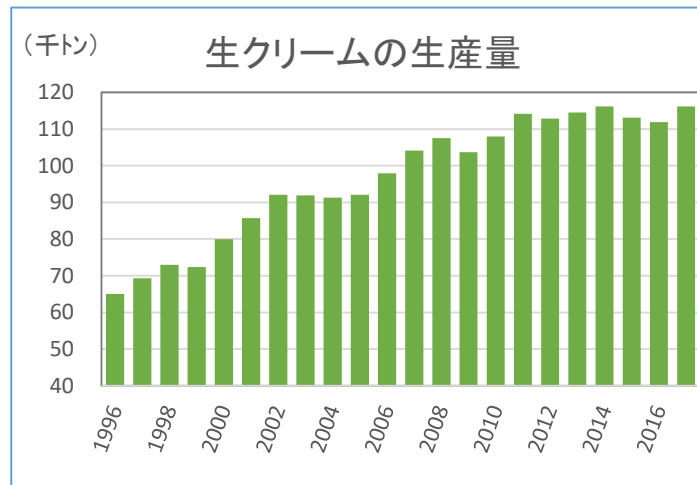
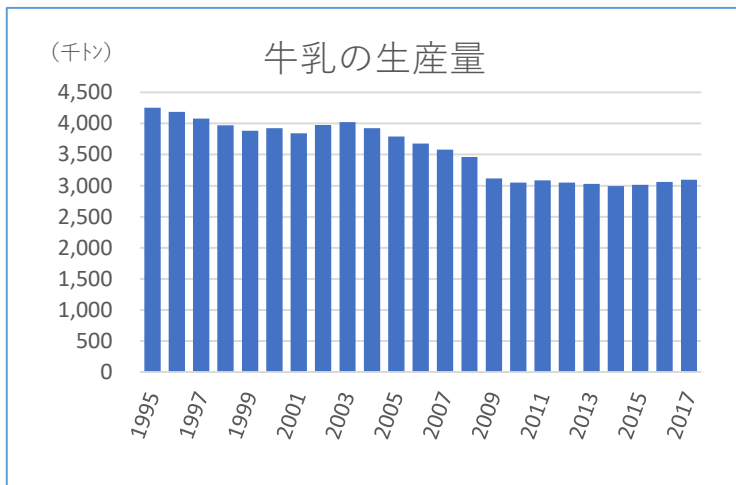
(足りなくてもすぐに増産することは出来ない)
(余っても生乳のままでは保管できない)

【余剰時の乳製品処理】

【不足時の乳製品還元活用】

安定的な生乳生産に乳業が寄与

(参考) 主要乳製品の需要の現状①



【牛乳】

- 国内の生乳処理量の約4割を占める。
漸減傾向にあったが、近年は横ばい状態。

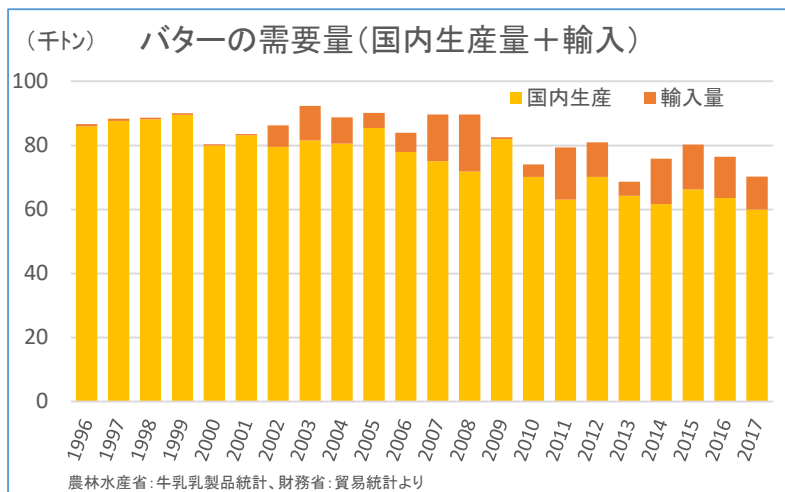
【はっ酵乳】

- 健康志向などを背景に継続的に増加傾向にあり、今後も期待できる。

【生クリーム】

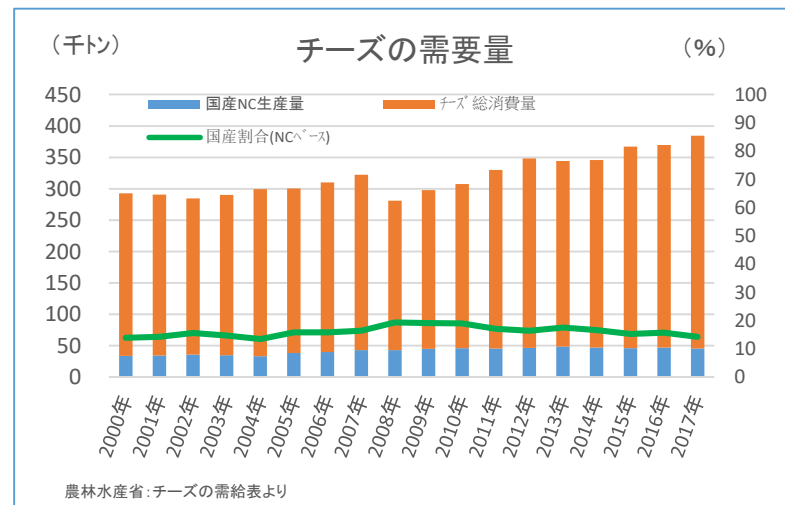
- 原料向けなどを中心に液状乳製品の需要は増加傾向。

(参考) 主要乳製品の需要の現状②



【バター】

- 近年は国内生産量の減少から、一定量の輸入が常態化。
- 国産バターの需要は非常に強い。



【チーズ】

- 全体の需要増加を背景に国内生産、輸入ともに増加傾向。
- ナチュラルチーズベースの国産割合は15%程度。

3) 課題及び検討の方向

(1) 酪農生産基盤の弱体化の懸念

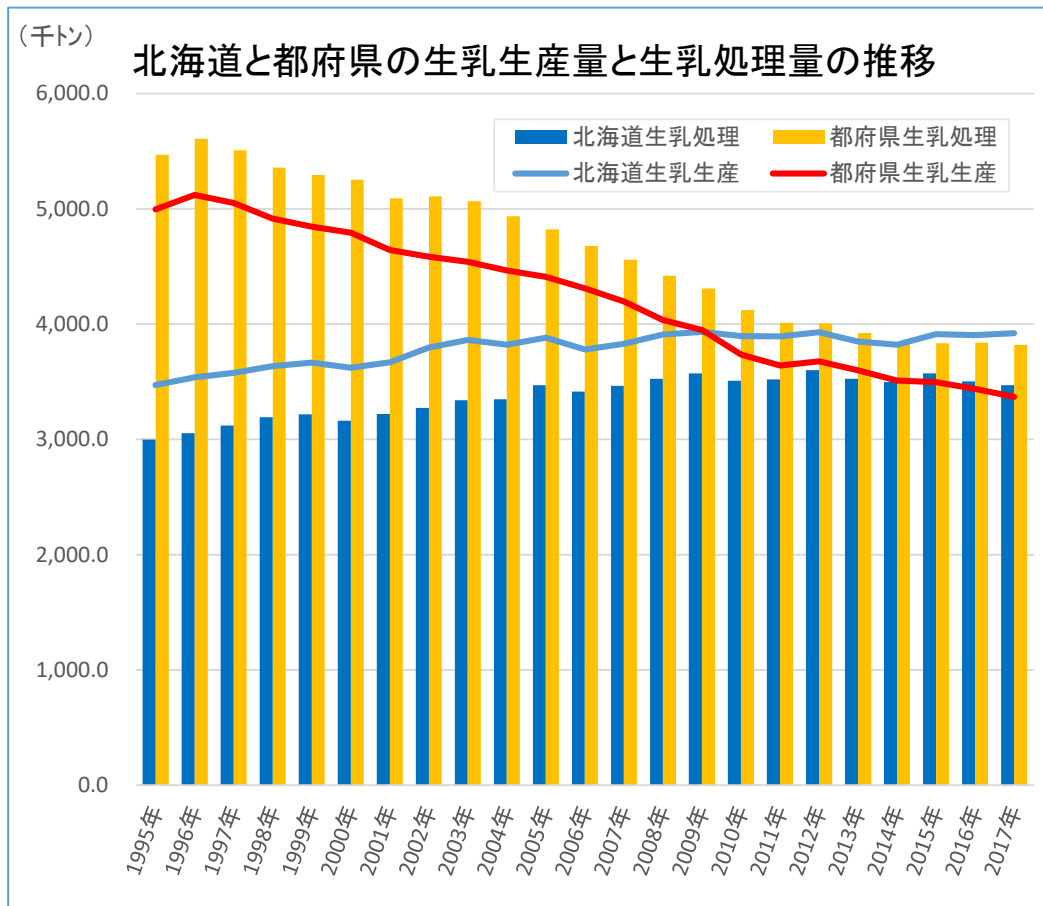
【① 担い手(後継者及び新規参入者等)の不足】 → 酪農家戸数の減少

- 新たな酪農制度の定期的な検証及び必要に応じた運用改善
- 新技術の導入等による労働時間等の軽減
- 酪農ヘルパー、コントラクター等の利用による作業の外部化
- ヘルパー要員、雇用労働者の確保
- 後継者・新規参入者向けの情報・支援の充実・強化
- 農業高校、農業大学校等への情報提供・連携
- 既存施設の第3者(新規参入者)への経営継承
- 酪農経営の強化

【② 乳用後継牛の不足】 → 乳用牛頭数の減少

- 肉用牛生産による影響の緩和
- 畜産クラスター事業等による施設整備、雌雄判別精液の利用拡大
- 供用期間の延長、廃業農家所有乳用牛の利用推進

(2) 生乳需給のミスマッチ【現状】



農林水産省：牛乳乳製品統計より

北海道の生乳生産(—)は増加傾向が見られるが

都府県の生乳生産(—)は減少傾向が著しい

需給を勘案したバランスを保った生乳供給の検討が必要

(2) 生乳需給のミスマッチ

【① 都府県の生産と飲用需要のミスマッチ】

→北海道から都府県への移送の限界

- 牛舎スペースの有効利用の推進
- 後継者及び新規参入者の確保
- 農協等による酪農経営への参入促進
- 北海道産「生乳・牛乳」の都府県への安定的供給体制の確保
- 学校給食用牛乳を含めた最需要期における「加工乳・乳飲料」での代替利用推進検討

【② 北海道の乳製品需要と生乳供給のミスマッチ】

→都府県向け飲用需要最優先によるバター等乳製品向け生乳の不足

- 飲用向け・乳製品向け双方の需要を勘案した生乳供給のあり方の検討
- 適時的確な輸入対応

【③ 中長期的に想定され得る需給緩和というミスマッチ】

→乳製品輸入の増加、乳用後継牛の増加等による、中長期的な需給緩和

- TPP11及び日EU・EPA等による乳製品輸入の増加、乳用後継牛の増加、チーズ関税割当制度の実効性低下等による、中長期的に想定され得る需給緩和時の対応方向の明確化
- 需給緩和時のバッファーとして、チーズの生産余力の維持・活用の検討
- 官民による在庫管理体制の検討

(3) 酪農支援組織の弱体化

→特に都府県の酪農支援組織

- 地域段階における酪農支援組織のあり方の検討
- 地方行政を含め、組織統廃合の下での酪農支援の活性化の検討

(4) 消費構造の変化及び消費者の信頼確保

→需要や市場環境の変化に対応した新商品の開発、付加価値の提供

【① 消費構造の変化】

- 少子・高齢化による消費行動・嗜好の変化への対応
- 外国人（実習生、観光客等）の増加に伴う消費行動・嗜好の変化への対応
- 長期低迷するデフレ市場への対応
- 風味変化問題への適切な対応

【② 学乳制度】

- 学校給食用牛乳供給事業の継続による牛乳の飲用習慣定着化
- 学乳向け生乳取引のあり方

【③ 乳の価値向上】

- 「適正取引推進ガイドライン」及び小売団体による「自主行動計画」を踏まえた適正取引の推進と付加価値の向上
- チーズの生産技術の向上
- 革新的な国産乳製品等の新商品開発による需要喚起及び付加価値の提供

(5) 国際環境の変化

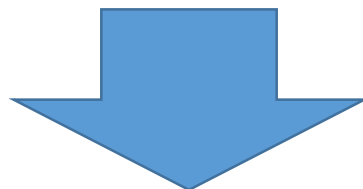
→ 輸入圧力の増大、環境配慮等の国際ルールへの対応

- SDGs、アニマルウェルフェア、環境配慮等の国際規範への対応
- 自給率の向上を含めた国際貢献のあり方の検討
- 生乳から製品までの品質・安全性の維持・向上
- HACCP制度化への対応
- 災害リスクへの対応も踏まえた乳業再編の継続

➤ 消費者から選ばれる牛乳乳製品の生産

(6) 数値目標

- 生乳生産量は、20年以上にわたり減少傾向
- 生産基盤回復の“芽”を伸ばし生産回復へ
- 生産者の意欲の喚起、生産回復に伴う需要の国産への回帰
- 生乳生産さえあれば、チーズなどの乳製品製造能力は十分
- 10年間で1/2回復(800万トン程度)を目標としてはどうか



わが国の酪農乳業という産業の発展を期して
「失われた20年を取り戻す」

ご清聴ありがとうございました。